

---

# へたおん！

火野村祭

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

へたおん！

### 【Zコード】

Z2271K

### 【作者名】

火野村祭

### 【あらすじ】

ヘタリアキャラクターたちが繰り広げる、「けいおん！」

## プロローグ（前書き）

ド素人です。文章力皆無です。お見苦しい所もありますがよろしく  
お願いいたします。

ちなみに「けいおん！」の原作コミックスをもとに作成したもので  
すのでアニメとは少し違うと思いますがよろしくお願いします。

プロローグ

「アーサー！」

元気にそう友人の名前を呼ぶのは、この春入学したばかりの一年生、アルフレッド・F・ジョーンズだ。

名前を呼ばれたアルフレッドの友人、アーサー・カーランドが振り向く。

「アルフレッド。何だ？」

「クラブ見学に行こう！」

「クラブ見学?」

「軽音部だよ軽音部！」

アルフレッドが少しテンションを高めてしまった。

「でも俺文芸部に入るつもりだし…」

入部届も書いたし、とアーサーはアルフレッドに自信の文芸部の入部届を渡す。

ビリーバー

(アルフレッドが入部届けを破く音)

「何すんだよアル――――――」

「ほり行ぐぞ早く早く」

アルフレッドはアーサーの声をじとじとく無視し、無理矢理アーサーの手を引きながら走つて音楽室へと向かつた。

- 音楽室 -

「……へ？」

「廃部した？」

驚くアルフレッドの隣ではアーサーが走つてきたせいで息を乱している。

「正確には廃部寸前だな」

そう言つのは、教師のフランシス・ボヌフォアだ。

「昨年度までいた部員はみんな卒業しちやつて、今月中に4人入部しないと廃部になつちやうつんだよ」

先生一

「あ、」めんな 呼んでるから

がんばつてーと言つと、先生は行つてしまつた。

「…………」

「なんか、優しそうな先生だつたなー」

「でも廃部なら仕方ないな 僕は文芸部に……」  
そう言って音楽室から出て行こうとするアーサーの襟をアルフレッドがむんずとつかむ。

「誰もいなって事は、今入部すれば僕が部長…  
ふふ…悪くないな」

「…………（＝A＝・）」

アーサーは呆れて何も言えなかつた。

ガラツ

そのとき、音楽室の扉が開き、一人の男子生徒が入ってきた。  
「あのー……」

彼もこの春入学したばかりの一年生、名前は本田 菊。

「見学したいんですけど…」

「軽音部のー?」

アルフレッドが、菊の肩をガツとつかむ。

「いえ、合唱部の…」

「軽音部に入らないか？今部員が少なくて…」

「こりゃ…！そんな強引な勧誘したら失礼だろーー…」

アーサーが、強引な勧誘をし始めたアルフレッドを菊から引き離す。

「それじゃ 僕も行くから…」

そう言ってアーサーは、音楽室から出でていった。

「アーサー…」

「あのときの約束は嘘だったのか！？俺がドラム アーサーがベースですっごバンド組もうつて…！」

「アル…」

アルフレッドの声にアーサーは立ち上まり、振り向く。

「それでプロになつたらギャラは7・3なつて

「捏造するな…！」

『ンッ

アーサーがアルフレッドの頭にチョップを食らわせる音

ふつ…

くすくす…

「なんだか楽しそうですね

キーボードへりこしか出来ませんけど、私でよければ入部させて下さい」

菊のその言葉で、アルフレッドの顔は笑顔に、アーサーの顔は驚きの顔に変わる。

「ありがとーっ！！これであと一人入部すればっ！！」

「…俺ももう人数に入ってんだな…」

アルフレッドはとても嬉しそうだ。アーサーは諦めの表情が出ている。

「あとは ギターだな！」

## プロローグ（後書き）

文章力なくてすみません。rz  
詳しく知りたい方はけいおん！『ハックスのお買い求めをおすすめ  
します。

## 第一話（前書き）

やつと第1話です。  
生暖かく見守つてやつて下せ。

## 第1話

「…………うん……」

教室の自分の机でうなつてているのは、この春からの一年生、フェリシアーノ・ヴァルガスだ。

「…何をうなつてるんだフェリシアーノ」

そうフェリシアーノに声をかけるのは、フェリシアーノの友人、ルートヴィッヒ・バイルシュミットである。

「ヴェー、ルート…実は、どの部活に入ろうかまだ迷つてて…」

「何!? まだ決めてなかつたのか? もう学校始まって2週間経つてるぞ?」

「でもでも 僕 運動音痴だし文化系のクラブもよくわからないし

…」

フェリシアーノが困惑の表情で言つ。

「はあ…………うなつて二ートが出来上がっていくんだな…」

「部活していないだけで二ート…?」

ルートヴィッヒの言葉に、フェリシアーノはガーン、ヒショックを

受けたのだった。

＊＊＊＊＊

それからじばうべ。

「とりあえず軽音部ってここに入部してみたーー。」

中飯の間、アヨリシアノが自信ありげに言ふ。

「ほー… で、**軽音部**に**じゃんない**をするんだ?」

「それ?」

即答。

「え？」

驚くルートヴィッヒを氣にも止めず、フェリシアーノはまぐまぐ、とピザを食べている。

「ヴニー、でも 軽い音楽つて書くから きっと簡単な」としかやらないよ。」

口笛とか！

「何だそのやる気のないクラブ」

\* \* \* \* \*

「ほら 何かバンドとかするみたいだぞ？」

何をする部なのかを確かめるために、掲示板を見に来た一人。

「ヴェー？俺、ギターなんて弾けないよ……」

「じゃあ何なら弾けるんだ？」

一瞬の沈黙。

「力…カスタネット？」

ルートヴィッヒは一瞬フェリシアーノがカスタネットを演奏しているところを想像する。

「……すじへ似合ひな」

\* \* \* \* \*

その日の放課後。

「ヴエ～…」ニカ～……」

フェリシアーノは音楽室の前に来ていた。

「入ったばかりで言いにくいけど…やつぱり辞めるって言おつ  
…軽音部つてどんな人がいるのかな？」

フェリシアーノの想像図には、某デスマタルバンドのリーダー的な  
人が描かれていた。

『ああん！？辞めたいだとおー… ただで辞めると思つてんのか  
KILLーー！ー！』

あわわわわわわわわ

自分の想像で慌てるフェリシアーノだった。

\* \* \* \* \*

ポンッ

「ひいつ！？」

急に肩をたたかれ、ビクッと驚くフェリシアーノ。

「うひの部の前で何をやつてているんだい？」

びっくりした…とフェリシアーノが振り向くと、そこにいたのはアルフレッド・F・ジョーンズだった。

「あ、もしかして君、入部希望のフェリシアーノ・ヴァルガスくんじゃないかい？」

ギターがすりへりまいるだって！？来てくれるの待ってたんだぞーーー！」

アルフレッドはさすがにフェリシアーノの手をガシッと止める。

(なんかあらぬ匂ひがついてるー!?)

\* \* \* \* \*

「みんなーー！入部希望者が来たぞーーー！」

困惑するフエリシアーノの手を引き、アルフレッシュは音楽室へと飛び込むようにに入る。

「本当かー！」

セツヒツのはすでに音楽室にいたアーサー・カーランドだ。隣には本田 菊もいる。

「よハジマ 軽音部へー！」

「歓迎いたしますーー！」

二人はフェリシアーノに駆け寄り、満面の笑顔で歓迎の言葉をかける。

反対にフエリシアーノはどんどん困惑していく。

「よしつ 菊お茶の準備だー！」

「はい！」

（ビ…ビ…ビ… 辞めるって言…）

\* \* \* \* \*

「…実は、俺たちも今年の新入部員なんだけど…  
先輩達がみんな卒業してしまって、今部員が俺たち三人だけなん  
だ」

アルフレッドの話を、フェリシアーノは出されたお茶を飲みながら  
聞いている。

「部員が4人いないとクラブとして認められなくて  
1週間以内にあと一人集まらなかつたら廃部になるといふだつたん  
です」

「本当に入部してくれてありがとう…！」

アルフレッドがフェリシアーノの手をガシッと握る。

( まあまあいいのう……… )

## 第1話（後書き）

ありがとうございました…恐れ入ります、すみません。

見て下せつた方にただただ感謝です。

## 第2話（前書き）

第2話です。  
よろしくお願ひします。

## 第2話

「え……？ 辞めるって言ひにきたのかい？」

「そ……そなうなのか……」

ガクー……

アルフレッドの落ち込みようこ、フューリーシアーノは慌てる。

「ヴォー、モ、モッと違つ楽器やるんだと細つて……」

「え？ ジヤあ何なり出来るんですか？」

「カス・タ・ネ……ハ ハー・モニ・カツ……」

見栄

「あ ハー・モニ・カならあるんだぞ！ 吹いて見せ……」

「いめんなさい吹けません」

まさかあるとは……と思つフューリーシアーノだった。

\* \* \* \* \*

「でも、うちの部に入らうと思つたってことは、音楽には興味あるつてことだよな？」

アーサーがたずねる。

「他に入りたい部活とかあるんですか？」  
続いて菊も。

「う、ううう特にね……」

「それならさ、俺たちの演奏一度聞いてから入部するかどうか判断しないかい？」

アルフレッドが提案する。

「ヴニー、演奏してくれるの？」

「やうやんこいんだぞつー。」

「——

（せいかくのカモをじりて手放すわけにはいられないんだぞつー。）

笑顔とは裏腹にそんなことを考えるアルフレッドだった。

\* \* \* \* \*

そして、アーサーがベース、菊がキーボード、アルフレッドがドラムで演奏を始める。

ジャー...  
...

「えへへ…どうつだつたかい？」

演奏が終わって、アルフレッドがフローリシアーノに訪ねる。

「ヴェー… なんていうか、すげく言葉にしにくいんだけど…

…あんまりうまくないねー。」

(バッサリだ――――――)

フェリシアーノの言葉に、結構ショックを受けるアルフレッドだった。

\* \* \* \* \*

「でもなんだか 楽しそうな雰囲気が伝わってきた―

俺、この部に入部するよ―。」

ワッ

3人から、喜びの声が上がる。

「ありがとう これから一緒に頑張ろつな―。」

アーサーが、フェリシアーノの手を取つて言ひつ。

「あ…でも俺全然楽器できないし…」

「あー・マネージャーとかどうかな―?」

「いや、運動部じゃないんだからよ…」

名案ーとばかり言つたフエリシアーノは、アーサーがツッコんだ。

\* \* \* \* \*

「そうだ！せつかくだから入部と同時に、ギターを始めてみたりどうでしょうか？」

「あ、それいいんじゃないかい？」

「この部 ギターいないしな」

「ヴェーーーで、でもギターってすごく難しそうなイメージが……」

フエリシアーノがこまつたような表情で言つた。

「大丈夫なんだぞ！俺たちもわかるといふは教えるし」

「ヴェーーー、そうだね。さつきの演奏聞いてたら俺にも出来るかもって思えてきた！」

自信わいてきた！という顔でフエリシアーノが言つた。

「それはよかつた」

やつらのアルフレッドの笑顔は引きつっていた。

\* \* \* \* \*

次の日のお題。

「えー？ 結局軽音部に入ったのか」

ルートヴィヒが驚愕する。

「うん、どうしても入部してほしうって言われて」

「マジか！？」

一瞬の沈黙。

「ああーマネージャーとしてとかな！」

「人に言われると何か悔しい……」

\* \* \* \* \*

「ちやんと部員として入ったんだからー。」

ふんすか、とフュリシアーノが呟つ。

「ギターーーから教えてくれるんだって」

「ほお～… フェリシアーノがギターをねえ…」

ルートヴィッヒはまだ半信半疑といつ田で見ている。

「あ とこいつとは新しくギター買つたりするんだな

「……5000円くらいで買えるよね?..」

ぽわーん

こんな奴つかまされて大丈夫か軽音部…と思つルートヴィッヒだつた。

## 第2話（後書き）

フェリがやつと軽音部に正式入部。  
次も頑張ります・・・！

### 第3話（前書き）

なんだか久しぶりの投稿です…！  
今回もどうぞよろしくお願いします！

### 第3話

「フューリシアーノ、一緒に帰らないか?」

鞄を肩にかけたルートヴィッヒが、フューリシアーノに声をかける。

「あ、ルート」

「『めん 今日どうしても部活に行かなきゃいけないんだ』」

フューリシアーノがノートや教科書を片付けながら苦笑いで答える。

「あ、そりなの…じゃあ仕方ないな」

(フューリシアーノにも打ち込めるものが出来たんだな…嬉しそうな悲しそうな…)

「今日は菊がおいしいお菓子持つてくれるんだー」

「ギター やるんぢゃないのか!?」

\* \* \* \* \*

\* 音楽室\*

「ねえねえなんでアーサーはギターじゃなくてベースをやりついで困つたの?」

『ベース担当のアーサー、かつこいい大人の男の人って感じです。』

「え、  
だつてギターは…

は…はずかしい」

「はずかしい！？」

少しだけ頬を赤らめて答えたアーサーに驚くフェリシアーノ。

\* \* \* \* \*

「ほり、ギターってバンドの中心って感じで先頭に立つて演奏しな  
きゃいけないし

観客の目も自然と集まるだろ？」

「あー…なるほど」

「自分がその立場になるって考えただけで…」

シュー…

頭から湯気を出しながら、白田をむいて倒れていくアーサー。

「アーサーつー?」

『…あと少し繊細です。』

\* \* \* \* \*

「菊はキーボードうまこよね  
キーボード歴長この?」

『キーボード担当 菊、おつとつぽわぽわしたかわいい人です。』

「私、小さい頃からピアノを習っていたんですね。コンクールで賞を  
いただいたこともありますんですよ」

「へへへへへ」

(なんで軽音部にいるんだね?)

『…あと、ことこのお坊ちゃんっぽいです。』

\* \* \* \* \*

「盥さん め茶が入りましたよー」

菊がお茶をお盆にのせて運んでくる。

お茶を飲んでいる時。

「 わう言えば、ずっと疑問に思つてたんだけど  
この部屋つて、やけに物がそろつてるよね  
最近の学校つてこんな感じなのかな？」

「ああ それは私の家から持ってきたんですよ」

「自前…?」

『…かなつのお坊ちやまつぽーです。』

\* \* \* \* \*

「アルフレッドはドラムへつて感じだよね」

「んなつ…?俺にもちゃんと始めた理由があるんだぞー。」  
「聞いてくれよ!」

『ドラム担当のアルフレッド、元気いっぱいの明るい男の子です。』

「へえ~ どんな?どんな?」

「それはえーっと…あれだよ」

「…かつこにいから（‘’にょ’’にょ’’）」

「ないんじゃん」

\* \* \* \* \*

「だ、だつてさーーー！ギターとかベースとかキーボードとか指でちまちますのを想像しただけで…」

「キーーーーーーーー！」

ガシガシ、と頭をかくアルフレッドごビクッと驚くフェリシアーノ。

「…つてなるんだよ」

息を切らすアルフレッド。

( 楽器選びにも性格出るんだなあ…… )

驚きでビビリと心臓を鳴らしながら思ひつかリシニアーノだった。

### 第3話（後書き）

あつがと「わざわこました。

次回は憂うやんが出てくる回ですよ~

## 第4話（前書き）

第4話です！ 今回は、ギター購入&弟登場！  
相変わらず駄文ですが、楽しんでいただけたら幸いです

## 第4話

「やうこえぱ、フリシアーノつてもうギターは置つたのか？」

アーサーがフリシアーノにたずねる。

「ウハ？ ギター？」

間。

「あーそつか俺ギターやるんだっけ！  
わすれてた！」

「… 軽音部は喫茶店じゅねえぞ？」

\* \* \* \* \*

「ギターつてどれくらいするの？ 値段」  
フェリシアーノがアーサーにたずねる。

「うーん… 安いのは一万円台からあるけど、あんまり[安]すぎるのも  
良くねえから、  
最低でも3万円くらいのがいいかもな」

「さんまんえん！？」

「俺のお金つかい半年分…」  
あわわわわ…

「高いのは一〇万円くらこするのもあるぜ。」  
アーサーがにやりといつ感じの顔で言ひ。

フーリーシアーノはアルフレッドのまつを回り、

「部費で落ちませんか?」

「落ちません」

笑顔で言つたら、笑顔で即答された。

\* \* \* \* \*

次の休日、みんなで楽器屋へ行く」と。

「あつフーリーシアーノ…」

フーリーシアーノが待ち合せ場所に行くと、もうすでにみんなが待つていた。

「お金は用意できましたか?」

「うそ、お母さんには理言つて5万円前借りさせてもらつた

「お金ついでいつ必要になるかわからんないよね…  
これからは計画的に使わなきゃ…」

…いけないんだけど…

この服…今なら買える…」

並んでるやっぱから洋服店のショーウィンドウに張り付いて、服を見つめるフーリシアーノ。

「うひひひひひひひ…」

アルフレッドがフーリシアーノの服をひつつかんで、ショーウィンドウからひつぺがすのだった。

\* \* \* \* \*

\* 楽器店 \*

「うわーっ…！」

すいーいギターがいつぱい！」

フーリシアーノが感嘆の声を上げる。

店の中を進んでいくと、ふと、ツインネックのギターが目に入る。

フェリシアーノの想像図には、四本腕の人形が『上に立ち』と言っている図が描かれている。

？？？？

「フェリシアーノ、なにしているんだい？」  
「うわー！」

\* \* \* \* \*

「うーん……いろいろありすぎて、どれがいいのかわかりません」  
頭に？マークをうがべるフェリシアーノ。

「何か選ぶ基準とかあるのかな？」  
「むむむ…」

「もちろんあるぞ」

気づいたアーサーが声をかける。

「ギターって音色はもちろん、重さやネックの形や太さもいろいろ  
あるんだ

だから「あ、このギターかわいいー！」

(聞いちやいねーーー！)

\* \* \* \* \*

「でもこのギター15万もあるんだって。」

値段を見たアルフレッドが言つ。

「あ…本当だ…」

「ヴォー…これはずすがに手が出ないや…」

「このギターが欲しいんですか?」

フーリシアーノの後ろから、菊がひょいとのぞく。

「ちよつと待つて下せこ」

そう言つて店員の所へと行く菊。

「あのー…ギターのお値段負けでいただけないでしょ?」

「あ…あなたは社長の息子さん…!」

ひいっ!!

「このギター、5万円で売つて下さるんつですよ  
」「うん

「ほ、本当に!?

「何ー?何やつたのー?」

\* \* \* \* \*

\* その日の夜 フェリシアーノの家\*

「えへへ…かわいいなあ…」

ギターを見てつぶやく、パジャマ姿のフェリシアーノ。

「持つてみたりして…

うをつー//ゴージシャン//ぽいーー！」

ギターをかついで、鏡の前に立つフェリシアーノ。

「サ、サインの練習しなきやー。」

フェリシアーノがハイテンションになっていると、

「冗談、いぬねー…」

弟のロヴィーノが、文句を言つにきたのだった。

夜は静かにしましょー。

\* \* \* \* \*

\* 次の日の朝\*

「兄貴ー！？」

早く起きないと遅刻するぞーー！？」

制服姿のロヴィーノが、階段下から声をかける。

「……兄貴？」

ロヴィーノが、扉を開けて部屋をのぞくと、

「添い寝！」

ギターと添い寝するフリシアーノの姿があつたのだった。

## 第4話（後書き）

今回もいろいろすみません。ごめんなさい。

余談ですが、最近の双子は後に生まれた方が兄姉だとか。

これからいつかの口ゲイには口は悪いけど兄貴大好きないい弟をやつてもらおうと思つてます。

有り難うございました。次回もがんばります。

## 第5話（前書き）

第5話です。

相変わらずの駄文。どうぞよろしくお願いします。

## 第5話

\* 音楽室\*

ジャーン、と、どこからともなく効果音が聞こえてきそうな感じで、ギターを抱ぎ堂々と立つフェリシアーノ。

おおー、と他の3人から声が上がり、拍手が起ころ。

「ギター持つとそれらしく見えるな」  
アーサーが言づ。

「なあ何か弾いてみてくれよー。」  
続いて元気なアルフレッド。

「…………」

チャラリ～ララ～

「チャ メラ!？」

\* \* \* \* \*

「フエリシアーノ、家でギター練習してないのか?」

アーサーが心配せりふに詰つ。

「家じゅけたらかしなんじやないのかい？」

「わ、そんなことないよーーー。」

「すうじい大事にしてるんだよ？　ほひつがついたらふいたり  
鏡の前でポーズとつてみたり、添い寝してみたり、写真撮つてみたり  
ボーッと眺めて一日が終わつたやうなことわざよつたやう…」  
「弾けよ」

\* \* \* \* \*

「いやー、ギターつてきらきらぴかぴかしてゐるから  
なんか触るのが怖くつて…」

「ああ、分かる分かる

そういうえばギターのフィルムもはずしてねえもんな

両手の人差し指を合わせながらフエリシアーノが言つて、アーサー  
が同意の声を上げた。

「…フエリシアーノつてもしかして携帯のモニタのフィルムもはが  
してねえんじやねえの？」

「ヴォーす」い！ なんでわかつたのー？」

\* \* \* \* \*

その2人の後ろでは、アルフレッドがうずうずしていました。

「ハヨウハヨウシトコヌ畠田セ、

フェリシアーノのギターのファイルム。

「えー、いつ！」

ビリーツ

(アルフレッドがギターのフィルムを剥がす音)

「ああ―――つ―!?

我慢が出来なくなつたアルフレッドは、フェリシアーノのギターの  
フィルムをばがしてしまい、それに驚いたフェリシアーノが声を上  
げた。

•  
•  
•  
•  
•

ふる  
ふる

… フェリシアーノが泣きそうです。

「な……なんぢやつてなんだぞー……」

\* \* \* \* \*

ずーん…

フェリシアーノは体育座りで落ち込んでしまった。

あわわわわわわ

アルフレッドは慌てます。

「まじ あやまれ」

「！」『めんつ ほんの出来心だつたんだ！…』

アーサーに促されてアルフレッドが謝る。

「ほーらー！ 菊が持つて来たお菓子だぞー！」

どうにか落ち込むフェリシアーノを立ち直らせようとするアルフレッド。

「そんなんで機嫌が直るわけ…」

アーサーが口を開くと、

もべ もべつ

お菓子を明るい顔で食べ出すフェリシアーノ。

(なあつた――――!?)

単純なフェリシアーノに、驚くアーサーだった。

\* \* \* \* \*

「せうだよね… やつぱりギターって弾くものだよね…

ただ大事にしてるだけじゃギターもかわいそつだよね

お菓子を食べるのを中断して言つフェリシアーノ。

「ありがとうアルフレッド

俺 やる気でてきたよ。」

「えへ…おお お、そつかい?」

「うんー」フーリシアーノがギター練習するもつかけになると思った

んだぞ！

さすがお<sup>エスガ</sup>「ハハー。」

「調子<sup>ヒトコト</sup>」のぬな

得意げになつてこのアルフレッドの脇腹に、アーサーが肘を入れた。

\* \* \* \* \*

「お……おお……」

キレイにアーサーの肘が入つたアルフレッドは、壁に手をつき痛みに耐えていた。

「ヴニー、それにしても……」のお菓子すみじよーーー

「菊、こんな高そうなお菓子いつももらひかやつていいのかな？」

お菓子を食べながらたずねるフーリシアーノ。

「いいんですよ いつもいろんな方からいただくんですけれど、家に置いておいても余らせてしまつだけですから、誰かんに食べていただいた方がいいんです」

にこにこ

(こんな人から余るほどお菓子をもらひ家つてどんな家ー…?)

お菓子を食べる手を止め、驚くフーリシアーノだった。



## 第5話（後書き）

変なところで切ります。

今回も有り難うございました。

次回は久々（？）にルート登場。

## 第6話（前書き）

第6話です。

今回は久々（？）にルートが出ますよー！  
相変わらずの駄文ですー。よろしくお願ひしますっ！

第6話

「もし、こえば、ギターやつてギターでライブみたいな音出すの？」

フェリシアーノが頬に人差し指を当て、疑問のポーズで言う。

「ああ、アンプにつないだら出るぞ  
つないでみるか?」

アーサーが音楽室のすみにあるアンプを押しながら言ひ。

アンプにギターをつないで、音を出してみる。

ジャーラーン

「…まだチャメラしか弾けないけど」

チャラリーララ

六六六六六

「アンプで音を出すのもう少し練習してからだね…」

トホホ…と言いつつフエリシアーノを菊が困ったような笑いで見ている。

アンプにつないだコードを、フエリシアーノが抜こうと呴く。

「あっ…！ フエリシアーノ あぶねえっ…！」

「へ？」

アーサーの声が聞こえたのは、フエリシアーノがコードを抜く瞬間だった。

ボンッ！！！！

アンプからものすごい音量の音。

もちろんコードを抜いたフエリシアーノはアンプのすぐ前に倒るわけ。

「アンプのボリューム上げる前にコード抜くとそつなかまつんだよ…  
だこじょぶか？」

「ヴォー……は…早く言つて…」

アーサーの声にささづ答えるフーリシアーノは、耳がキーンとなつていた。

\* \* \* \* \*

「ギターの弦つて怖いよねー

細くて硬いから指切っちゃいそう」

ギターの練習をしていたフエリシアーノが、アルフレッドに向つ。

ピーン

アルフレッドはひらめいた。

「やうなんだぞー

氣をつけないと指がスパー——ツと切れて血がドバ——ツヒ

…

「ツ もや———！」

「…なんでアーサーが悲鳴を… フーリシアーノを驚かそうとした

」

のに……」

「ヴォー、かわいい悲鳴？」

「い……痛い話はダメなんだ……」

アーサーはうずくまって手で耳を塞ぎ、ふるふるとふるえていた。

\* \* \* \* \*

「おほんっ、ギター練習してついに指の先が硬くなるから、血が出たりする」とはないよ

復活したアーサーが、取り乱してしまった恥ずかしさで顔を赤らめながら言つ。

「ほり、俺はベースだけど」

そう言つてアーサーはフーリシアーノに手を差し出す。

「ヴォー 本当だ」

フーリシアーノは差し出されたアーサーの手の指先を触つて言つ。

ふに ふに

ふに ふに ふに ふに

「あの……フーリシアーノ?」

ふに ふに ふに ふに ふに ふに

「も…もつかないだけ」

\* \* \* \* \*

「ギター練習するって言つても、いったい何から始めていいやらわ  
かんないや」

フエリシアーノが腕を組んで言ひ。

「どうあえず最初はコードを覚えるところぞ」  
そう言つてアーサーが手渡したのはコードが書かれている冊子だ。  
「わ、ありがとう」

冊子を開き、コードを眺めるフエリシアーノ。

・ · · ·

ふしゅうしゅう

( フエリシアーノが頭から煙を出す音 )

「あ…まずは楽譜の読み方から教えてください…」

「そこから…?」

\* \* \* \* \*

\* 下校時\*

「それじゃまた明日ーー！」

みんなに手を振るフヨリシアーノ。

帰り道でもコードを練習します。

「U...D...」

「フヨリシアーノーー！」

名前を呼ばれたフヨリシアーノは振り向く。

「あーールートーー！」

ガツーと上げた手はコードを押さえる形になっていた。

「…何だそれ新しいあいさつか？」

\* \* \* \* \*

「えへへ 今日ギターのコードを教えてもらつたんだー」

「ほー、頑張つてゐるんだな」

ルートヴィッヒとならんで歩くフーリシアーノが笑顔で話す。

「ヴェー、そういえばルート 今日は帰るの遅いんだね？」

「ああ 図書館で中間テストの勉強をしていたからな  
「へえ~」

てくてく

「えー!? 中間テスト! ?」

フェリシアーノがビシッとあげた手はまたコードを押さえる形になつていた。

「…それもコードか?」

\* \* \* \* \*

「そつかあ… もう中間テストなのかあ…  
はあ… とフーリシアーノが溜息をつく。

「せつかくがんばつてギター練習しきつと思つたのに…」

「.....」

「...お前今まで試験勉強なんてしたことなかつたじゃないか」

「そつかーなら大丈夫だネ」

「いや...大丈夫じゃないが...」

明るくウインクして言うフェリシアーノに突っ込むルートヴィッヒ  
だった。

## 第6話（後書き）

テストとかマジめんどこですよね。  
有り難うございました。

## 第7話（前書き）

第7話で「jyoti」ます…

なんか新連載とかやつてたらじつち忘れてました。rzn  
こつちもがんばんなきやー。軽音なんみんなに萌えるために

## 第7話

\* 音楽室\*

「うーんっ やつとテスト終わったんだぞーーー！」

そう言って大きくのびをするアルフレッド。

「高校に入つて急に難しくなつて大変でした」

眉をハの字にして微笑むのは菊だ。

「そうだな……そして」

アーサーが振り向いた視線の先。

どよーん……

「もつと大変そうなやつがここに……」

テストの答案用紙を手に暗いオーラを出すフェリシアーノがいた。

「そ……そんなにテスト悪かったのか？」

\* \* \* \* \*

フェリシアーノのものすゞく暗いオーラに、おそるおそるアーサーが聞く。

フェリシアーノはアーサーに答案用紙を手渡す。

「ヴェー…クラスで1人追試だつてさ…」

うつむな田で言うフェリシアーノ。

アーサーは、手渡された答案用紙の右上の一2といつ数字を見てうわあ…と思った。

「大丈夫ですよ! 今回は勉強の方法が悪かつただけじゃですか?」

「そつなんだぞー! ちょっと頑張れば追試なんて余裕余裕!」

慌てて励ましの言葉をかける菊とアルフレッド。

「…勉強は全くしてなかつたけど…」

「励ましの言葉返せなんだぞ」

フェリシアーノの言葉に額に怒りマークをつけたアルフレッドだつ

た。

\* \* \* \* \*

「なんで勉強しなかつたんだい？」

腰に両手をあてて皿つアルフレッシュ。

「いやー…しようと思つてたんだけど…

なんか試験勉強中つてさ、勉強以外のことに集中できたりしない？」

苦笑いで皿つフロリシアーノ。

「あーそれはあるね 部屋掃除はかどつたりとか」

「勉強の息抜きにギター練習したら抜け出せなくなつて  
結局全然勉強できなかつたんだ」

「でもおかげでコードほどんど弾けるよになつたよー。」

びしーヒュースした手を突き出して皿つフロリシアーノ。

「いや、すまいけどな…その集中力を少しでも勉強に回せば…」

苦笑いで囁つアーサーだった。

\* \* \* \* \*

「とにかく、やつ囁つアルフレッドが死んだったのセーー。」

「ん？ 僕かい？」

「余裕なんだぞ！

」の通り！」

バーン、という感じで答案用紙を突き出すアルフレッド。右上に書かれた赤い数字は89。

フヨリシアーノはアルフレッドの答案用紙を手に取る。

どうだ、と囁わんばかりにふんぞり返るアルフレッド。

「……こんなのがアルフレッドのキャラじゃないよ……」

「なんだつてー…どうこの意味だい…」

フヨリシアーノの言葉に、くわづ、となつて囁つアルフレッド。

\* \* \* \* \*

「俺はヒーローだからなんでもそつなくこなすんだぞー。」

H A H A H Aと笑つてアルフレッドは言ひ。

「うう…アルフレッドは俺の仲間だつて信じたのに…」

笑うアルフレッドを見ながら、涙田のフューリシアーノが言ひ。

「…テスト前日に勉強分からないつて泣きついてきたのはどいの誰  
だっけ」

によによ顔のアーサーが横からそいつに。

「あつ！？バラさないでくれよーー！」

顔を少し赤くしたアルフレッドが言い返す。

「それでこそアルフレッドだよー！」

「赤点とった君に言われたくないんだぞーーー！」

がしつとアルフレッドの肩をつかんで言ひフューリシアーノに、叫ぶ  
ようにしてそう言つたアルフレッドだった。

\* \* \* \* \*

「とりあえず追試で合格点取るまで 部活動は禁止だつて…」

よつかんを食べながらフェリシアーノが言つ。

「えー？そ…そしたら部室にいるのもまずいんじゃないかい！？」

フェリシアーノの言葉にみんなが驚く。

「ウハー、大丈夫だよ お菓子食べに来てるだけだし」

笑顔で言つフェリシアーノ。

「そつかそれなら安心だね！」

笑い合つアルフレッドとフェリシアーノ。

……

「なんでやねなんんだぞ」

腕でフェリシアーノの首をしめるアルフレッド。

「ギブ、ギブギブッ！…」

\* \* \* \* \*

「……というわけで、アーサー助けて」

「え…俺？」

アルフレッドから解放されたフェリシアーノがアーサーにすがりつ  
く。

「…仕方ないな… それじゃ 今日勉強会するかー！」

「本当ー？」

アーサーの言葉に嬉しそうな顔をするフェリシアーノ。

「フェリシアーノもアーサーに教えてもらえば確実に合格点とれる  
よー」

「うまいんだぞ？アーサーは…

一夜漬け術教えるのが！－

「うおーーー！印象悪いなーーー普通に勉強教えるよーーー！」

アルフレッドの言葉にシッコリを入れるアーサーだった。

## 第7話（後書き）

テスト氏ね。（コルコルコルコル…）

中間テストまじめんどいよー

テスト週間早く帰れるといはいいけどさ。

読んで下さりありがとうございました。次も頑張ります

## 第8話（前書き）

どうも火野村祭です…すみません！  
いやあテストやり部活やりなんやうで…中学つて大変ね

今回のお話口づきが出るんですけど、かなりキャラ違いますのでご注意願います。あの口づきが礼儀正しいよ！

それでは第8話、よろしくお願ひします！

フェリシアーノの家で勉強会をすることに。

「ただいまー！」

みんなあがつてあがつてー！」

「お邪魔しま～す」

フェリシアーノの家に初めて来る3人です。

「兄貴おかえりー

…あれ？友達？」

ロヴィーノが部屋から出てきて、3人を見る。

「はじめまして弟のロヴィーノです 兄がいつもお世話になつてます

礼儀正しく3人にペ～ツとお辞儀をするロヴィーノ。

( ( ( 出来た子だーーーーーーーーーー ) ) )

兄と比べしつかりした弟に3人は驚愕するのだった。

\* \* \* \* \*

\* フーリシアーノの部屋\*

「……いやー……

兄弟でいつも違つものか?」?

「何が?」

アルフレッドの喫葉に首をかしげるフーリシアーノ。

「弟にいい所全部吸いとられたんじゃないのか?」?

「ひどーーい!!!!」

「…………あの~…………」

アルフレッドとフーリシアーノが話していると、ロヴィーノが入ってきた。机にはお茶とお菓子がのったお盆。

「姫さんよかつたらお茶どうぞ 買い置きのお菓子で申し訳ないんですけど……」

微笑みながらハーフロヴィーノに、

( ( ( 本当に出来た子だ——————( ) ) )

と、再度驚愕する3人だった。

＊＊＊＊＊

そして、勉強を始めたフェリシアーノ。アーサーが教え、その横では菊が見ている。

「？」

「…が…」

「あー、なるべしー。」

そんなやりとりをするフェリシアーノとアーサーの後ろでは、アルフレッドがベッドに腰掛けて暇そうな顔をしていた。

「ひがーーー！」

転かへたり、

二九

椅子に座つて回つたり、

「お、  
マンガ！  
」

本棚からマンガを出してきたり

マンガを読んで大笑いし始めたときアーサーの我慢の限界がきた。

六六六六六

[REDACTED]

Lk. 14

静かになつたアルフレッドの頭にはたんごぶができていた。  
つこさつきアーサーにつくられたものだ。

勉強するみんなを見ていたアルフレッドは、足をもぞもぞとやせるフェリシアーノの姿をとらえた。

「（小声）あ…足が…しびれ…」

ピーン

アルフレッドはひらめいた。

た。

アルフレッドは廊下に放り出され、バタンッと部屋の扉が閉められた。

アルフレッドの頭にはもう一つたんこぶが増えていた。

\* \* \* \* \*

「……う~」

フェリシアーノがうなる。

「ヴェエー、ダメだ〜やる気が続かない〜」

「お〜お〜、まだ30分も経つてねえぞ?」

机に突つ伏してしまったフェリシアーノを、アーサーが呆れたような顔で見る。

「フェリシアーノ君、ケーキ持つて来ましたから後で食べましょ〜。だからもう少し頑張って下さい」

「ケーキ……」

菊が持つているケーキの箱を見るフェリシアーノ。

カリカリカリカリ

一気にやる気を取り戻し勉強を再開した。

「頑張つてください！」

(…さすが菊！…)

笑顔の菊を見てそう思うアーサーだった。

\* \* \* \* \*

「できたっ！！！」

問題を解いた紙を掲げて笑顔のフェリシアーノ。

「これだけ解けたら大丈夫だろ」  
腕を前に伸ばしたアーサーが言つ。  
「これで追試もしつかりできますね」  
アーサーの隣の菊が言つ。

「それじゃ私たちはそろそろ…」

菊が鞄を持つ。

「…あれ？アルは？」

リビングから間の抜けたようなゲーム音が聞こえる。

「うおっ 負けそう！」

そこにはテレビ画面の前でコントローラーを握り力ちかちやつてい  
るロビイーノとアルフレッドの姿があった。

（なじみすぎ……！）

アルフレッドを探しにきたアーサーは、寝転がりながらゲームする  
アルフレッドを見て思つのであった。

\* \* \* \* \*

\* 追試返却日\*

「大丈夫かフェリシアーノのやつ…」

音楽室でフェリシアーノを待つ3人。

ガラッ

音楽室の扉が開き、フェリシアーノが入ってきた。

「ど どうだつた！？」  
アーサーが聞く。

「…エリ…エリシヨウアーサー」  
ふるふると震えるフーリシアーノ。

「え…また駄目だったのか?」

「…100点取っちゃった」

「極端な子つ……！」

解答用紙を見せるフーリシアーノに驚くアーサーだった。

\* \* \* \* \*

「どうあえずこれで一段落だな…」

「そうですね」

アーサーはほつと溜息をつく。

「ヴォーーーみんなのおかげだよ、本当にありがとうー。」

「いやあ～それほどでも…」

「お前は何もしてこない」

フーリシアーノの言葉に照れたようすにするアルフレッド、アーサーがツッコミを入れる。

「じゃあ追試合格祝いにカラオケでも行こうかー。」「ヴォーおじつてくれるの?」「ないんだぞ」

そんなやりとりをするアルフレッドとフェリシアーノを見るアーサーと菊は、思つ。

(「ギターの練習に復帰させるまでが一苦労《だな／ですね》……」)

そして2人で苦笑いをした。

## 第8話（後書き）

ありがとうございました！  
いやあなんか書いてたら肩こりがちになりました。  
次回もよろしくお願ひします。

## 第9話（前書き）

なんか…久々…って感じがしますね。へたおんの更新。

今回は合宿になります…！

であであ、どうぞ

第9話

\* 本田家プライベートビーチ\*

一夏だ！」

一海だ！」

—泳ぐそ— ! ! ! !

水着姿（水着は皆さんの想像で結構です）でそう叫ぶのはアルフレッド。隣にはビー・チボールを持ったフェリシアーノもいる。

「おーい  
あんまりハメばすしそうるなよー!」「

少し遠くから、その言ひのまゝ、ちりも水着姿のアーサーである。隣に  
は菊。

「フェリシアーノ！水がしそつぱいんだぞ！」  
「塩！塩だよアルフレッドー！」

「え、聞いちやいねえ」

なぜみんながこんな所にいるかといえば、それは夏休み前にせかの  
ぼつます…

＊＊＊＊＊

- 夏休み前 -

「合宿をします！！」

部室でアーサーがみんなに向けてそう言った。

「え？ 合宿！？」

本堂かしら!!?海!!?山!!?

「遊びで行くんじゃないぞ！」

バンドの強化合宿！朝から晩までみっちりと練習するんだ！！

はしゃぎ出すフロリシアーノとアルフレッドニアーカーが喜んでいた。

「着ていい服買わなあせ！」

「水着も買わないとな！」

「聞け―――つ―――！」

\* \* \* \*

「フェリシアーノが軽音部に入つて数ヶ月経つのに、未だまともに  
バンドの練習したことないだろ?」

アーサーは誰？。

「それはそうと…何で急に？」

マニラハラバウアラフバービ。

「夏休みあけたら文化祭があるだろ?」

「文化祭」！？

靈にうたれたよ」なるアルフレッジ。

卷之三

「一ノ山」の題字

六六六六六

「うーん、ちょっとしたジョークなのに…」  
「…」

「うううアルフレッドの頭にはたんじぶが出来てこむ。 もしからんア  
ーサーがつくれたものだ。

「でもアーサーなら執事服とか似合いそうだね  
あ、メイド服で

もいいかもし

—なつ？！！

アルフレッドの言葉に、ビクッと驚いて顔を赤くするアーサー。

「お…俺が…」

アーサーは自分の執事姿とメイド姿を思い浮かべてもんもんとする。

「ふふふ、なんてねー〔冗談だよ〕冗談」

バキつ

「アルがいじめる～…」

「おーよしよし」

菊に慰められるアーサーの少し後ろでは、たんこぶを増やしたアルフレッドが倒れていた。

\* \* \* \* \*

「でも合宿つていってもスタジオ付きの旅館なんてあるのかい？」

「俺 お金ないよ?」

「う…」

一人に言われて言葉に詰まるアーサー。

「さ...菊別荘持つてたりしないか...?」

「ふーふーと文句やらなんやらを言つ一人を両手で制止しながら菊に言つアーサー。

「ありますよ?」  
につこり

( ( ( どんだけ――――――!?) ) )

一人はてなマークをうかべる菊を見てそつ思つ三人だった。

\* \* \* \* \*

「うわ―――す」―――い――

別荘前。 そう言つたのはフェリシアーノだった。

「で、でかいんだぞ―――!――

アルフレッドが驚愕の表情で言つ。

「ねえ菊、本当にこんなところまで来つていいの?」  
フエリシアーノが聞く。

「本当はもつと広いところに泊まりたかったんですが、一番小さい所しか借りられなかつたんです。ごめんなさい」

(「これで一番小さいの――!?」)  
(「――いつか他にも弱虫あるのか――!?」)

菊の言葉にさらに驚愕するアルフレッドとアーサーだった。

\* \* \* \*

おはよう

「…！…！…！」

すでに水着に着替えているアルフレッドとフーリシアーノを見て言うアーサー。

「おこねこじりに来た田舎は遊びにいって……」「

突撃——!!!!!!!!!!

ダッと駆けていつてしまうアルフレッドたち。

ぽつーーーん

「……」

一人のこされたアーサー。

「……俺も遊ぶーーー！」

涙目で荷物から水着をさがすアーサーを、アルフレッドとフェリシアーノがにやりとして見ていた。

## 第9話（後書き）

文才がどいじかにこころがり落ちないかと思つ今日この頃です……！  
ありがとうございます。へたおんもがんばって更新していきたい  
と思います。

## 第10話（前書き）

今回……これ、なぜこですよ俺的にですかど……！

アーサーかわゆす WWWWW

あっ、ではでは、いらっしゃり！

## 第10話

「わやつわやつと笑つて、ビーチボールで遊ぶフエリシアーノとアルフレッド。

「うおー綺麗なこだなー」

周りを見渡してアーサーが言つた。

「…………」

アーサーをアルフレッドが無言で見つめています。

「？」

「くらえ—————！」

「バシッ—————！」

「ぶはつ—————！」

「…………」

理由は「自由に妄想… まちがえた。想像してください。

\*\*\*\*\*

「わー！」

バチャンツ

「あいつたなー。」「やがて死ぬー。」

バシヤンツ

「ひゃー！ や二たなうえいえい」

「ハハ、負けるかー！」

「わー！　アーサー、それ見えてるだろーー！」

「見えてない世！スイカはここちかなー！」

「ハ、わたくし！あああん！」

「アーティスト」(柳家金語郎)

卷之三

「ふう〜遊んだんだぞ〜」

「あつ…・・・バンド練習…・・・」

アーサーが思い出して大きな声をあげた。

「まつたく…アルフレッドが遊ぼうとか言つからせとんビ時間なくなつたじやねーか…」

「一番樂しそうに遊んでたのは誰だい」

六六六六六

「うわー立派なスタジオだなー！」

セーブのマーク一歩一歩である。

「なあもう今日はやめにしないかい  
溜息をついてアルフレッドが言つ。  
遊び疲れたんだぞ～」

「… そういうえばさつき海で遊んだ時思つたんだけどアルフレッド  
… 太つてないか？  
最近ドラム叩いてないからじやねえの？」

「わ」

T<sub>1</sub>, T<sub>2</sub>, T<sub>3</sub>, T<sub>4</sub>, T<sub>5</sub>, T<sub>6</sub>

半泣きでデリームを畳へアルフレッドを見てこやつ、とかのトーカーだった。

六

じゅーじーん

「す、じいです！弾けるよ、ひになつてますね！」

「えへへ～つがんばつたもん！」

フェリシアーノの演奏をきいて、菊がぱちぱちと拍手をし、それに得意気な顔でぶいっとピースをするフェリシアーノ。

「へ～… あとはチョーキングとかスライドとか、細かいテクニック覚えたら完璧だな」

フヨリシーアーを見てあいに手を当てそり言ひアーサー。

「チヨーキング？」

ପ୍ରକାଶକ

「違う」

フェリシアーノの首を腕で絞めるアルフレッドに、アーサーがツッコミを入れた。

六六六六六

「チョーキングっていうのは音を出しながら弦を引っ張るんだよ  
そうすると音程が上がるんだ」  
アーサーがフェリシアーノに説明する。

「こんな感じ」

グワーン

「三一七」

早速フェリシアーノも実践。

みよーん  
みよーん

፳፻፲፭

「え！？ そんなツボるとこひー？」

いきなり笑い出したフェリシアーノにアーサーは驚いた。

\* \* \* \* \*

「...」

フェリシアーノがうなる。

「もうギター持てない…」

「はやつ！－まだちよつとしか経つてないぞー？」  
そう言つてフェリシアーノはギターをおろす。

「だあつてこのギター重たいんだもーん！！」  
ぺたんとフェリシアーノが座り込む。

「…だから軽いやつ買えって言ったのに…」  
アーサーが言つ。

「誰だこのギター買つたの…」

「お前だ」

\* \* \* \* \*

-夜-

「ふう～」

「気持ちいい～」

「まさか露天風呂まであるとはな…」

みんなで露天風呂につかっています。

「でもそんなに心配することなかつたな」

「フヨリシアーノ君もつまくなつてましたしね」

笑う菊とアーサー。

「だからいつも遊べばよかつたのに…」  
「誰だ―――――つ―――」

\* \* \* \* \*

「俺なんだぞ」

「前髪なげえ……」

アルフレッドが、前髪をわけて顔を見せた。

\* \* \* \*

「今日初めてみんなとあわせてみたけど・・・

すりごい楽しかった！やつぱり音楽つていいね！」

明るい顔でそう言うフューリシアーノ。

「合宿しようつて言つてくれたアーサーのおかげだよ！  
ありがとう、アーサー！」

「え？！あ……あう  
フェリシアーノにぎゅつ、と、両手で手を握られて顔を赤くするア  
ーサー。

「アーサーってば照れてるんだぞ――――――」  
「ち、ちが・・・のぼせただけだ――――――！」

そうして過ぎていへぬ夜でした。

## 第10話（後書き）

あつがとりやれました。

しかしこれは、2525動画でへたおん動画がたくさんあるんですね。

これは……！

イタひやん……！イタひやん……！

浪川さん仕事し……え？違つの？

## 第1-1話（前書き）

どうも、火野村祭です。

25動のへたおん系動画のクオリティの高さとかに涙がでそうです。  
。

では、本編どうぞ！

## 第11話

「あいたつ！」

音楽室。ギターの練習中のフェリシアーノが声をあげた。

「手の皮がむけちゃったー」

「うわあ…痛々しいんだぞ」

涙目で皮がむけた指をアルフレッドに見せるフェリシアーノ。

「あうう…ほりーアーサー見てー」

今度はアーサーに指を見せようとするフェリシアーノ。

「…アーサー？」  
「見えない聞こえない」

アーサーはうすくまじ手で耳をふれさせ田をつぶっていた。

「ははーん？」

きらーんとアルフレッドの目が光る。

「あーっ……俺もアーラムの練習のし過ぎで手のマメがつぶれちゃったんだぞーーー。」

アルフレッドが大声で言つと、ビクッ！とするアーサー。アーサーは両手で顔をおおつてゐる。

ぶるぶる...とアーサーは震える。

アルフレッドはこゝにある。

卷之三

アルフレッドはアーサーの近くに来て、笑顔でそう言い、アーサーをからかうのだった。

＊＊＊＊＊

「指の皮むいたりどんどん指先が硬くなつていくんだけれど、

「だからと書ってギターがつまくなつてこゝとは限りないけどねー」「がーんー！」

アルフレッドとフーリシアーノが話している。

…その後ろでは、菊がなんだか入りにくそうに出入りのところの柱に隠れるようにしていた。

「あれ？ 菊じゃないか」

「へ、どうしたの？」

会話をしていた二人が菊に気付いた。

「その…な、なんだか入りづらくて… 何な会話をしてるのがと…」

「ほえ？」

\* \* \* \* \*

「そういうえば畠山さんの見つけたんだぞー！」

そう言ってアルフレッドが取り出したのは一串の串… アルバムのようだつた。

「ほら見てみなよ

「何これ？」

アルフレッドが机の上でアルバムを広げる。

「昔の軽音部の『写真みたいだぞ』  
「ヴォ～…す”いね」

アルバムの写真は、どれもこれも濃いメイクをしたメタル系の人達  
が写っていた。

「この時代のバンドだよって感じだよな！」

HAHAHAとアルフレッドが笑う。

「そ そうだね」

（軽音部といえば）「このイメージしかなかった俺つて…」

ちゅうと冷や汗をかきながら思つフロリシアーノだった。

\* \* \* \* \*

「そういえば菊、さつきどこ行ってたの？」

フェリシアーノが菊にたずねる。

「学園祭のステージを借りる申請をしに行つて来たんですけど…  
軽音部つてまだちゃんとしたクラブと認められていないから断られ  
てしまいました」

「へ～」

「あ、この『写真す”ー』

・・・・・

「「く？」」

\* \* \* \* \*

「軽音部が部と認められていないだつてー?ー  
もつと緊張感出して言つてくれよ!ー!ー!ー!」

「す、すみませんっ」

「ヴォー、部員が4人あつまつたら大丈夫じゃなかつたの?  
「そのはずなんだけどなあ……」

アルフレッドは頭をかく。

「ていうか……クラブって認められてなかつたのに……」

フヨリシアーノは部屋を見渡す。

「……音楽室、好きに使つてよかつたのかなあ……」

『ティーセット等持ち込み。』

\* \* \* \* \*

「い、今まで何も言われなかつたから大丈夫なんだぞ きっと うん」

「そ、そりがなー」

アルフレッドとフェリシアーノは少し冷や汗をかいている。

「どうあえずどうなつてゐるか聞きにいくんだぞー生徒会室かな?」

「そうですね」

菊がこまつたよつた顔で言つ。

「……あれ? そりがなー」

アルフレッドが周りをみわたす。

「ああ アーサーなら」

「まだおびえてる」

「帰つて」――――――――

フヨリシアーノが指さしたところにいたふるえのアーサーを見てそう叫ぶアルフレッドだった。

## 第11話（後書き）

アーサーがｗｗｗｗアーサーがｗｗｗｗｗ

有り難いございました！次回も頑張ります！

あとアニメのCDパロとかもやりたいと密かに思つておりますｗ

## 連5中心verの配役を考えてみた。

「こんにちは火野村祭です！」

ちょっとへたおん！の連5verを思いついたので公開してみます！

唯 淳 律 紗 梓  
アル アーサー フラ兄 イヴアン様 にーに

和 『未定』  
憂 誰？（マシューだよー）  
さわちやん お菊さま

和役を誰かが決めてくれたらいいかも小説にするかもです。

こっちは大幅に改変ありっぽいし大変そうだけど…

まあ俺のこのへたおん！のおもいつきのもとは2525動画ですよ…

25動みれる人は、へたおん！でタグ検索かけてみてください。

ちょっと配役ちがつたりもするんですけど。

以上、火野村でした。

## 第1-2話（前書き）

いつも、なんやかんと週間だとこいつのしまつたくやる気が出ない  
火野村祭です。

今回は、顧問が、きまるんですけどね…

先謝りときます。さわちゃん役変えましたすみません。

では、本編をどうぞ。

## 第1-2話

\* 生徒会室 \*

「ん？」

「フューリシアーノじゃないか」

「あ、ルート！」

生徒会室へとやって来た軽音部の面々。生徒会室にルートヴィッヒがいた。

「友達かい？」

「うん、幼なじみなんだー」

「どうも。」

「ルートって生徒会役員だったんだね！」

「ああ」

「本当に友達？」

今まで知らなかつたのかい…と思しながらそう言つアルフレッシュドだつた。

\* \* \* \* \*

「…………うん

やつぱり軽音部は部活のリストにないな

部活申請用紙提出してないんじゃないか?」

部活リストを見ながらルートヴィッヒが囁つ。

「……そ、うこやアルが出ははずだつたよな。

『俺が部長やるから俺が出す!』

……とか言つて

「あ……忘れてた」

「やつぱりめえのせいかあああ……。」

「いひやいいひやい……。」

アーサーがむにーっとアルフレッドの頬をつねる。

「…………」

それをルートヴィッヒが見てくる。

「……なんといつか……」

軽音部つてフヨリシ!アーノ[ヒビタリ]だと黙つた

「ほえ?」

\* \* \* \* \*

《フランシス・ボヌフォア先生。

我が校の音楽教師である》

《その綺麗な顔立ちと柔らかな物腰で  
生徒だけでなく教師の間でも人気が高い》

『さうに樂器の腕前や歌声も素晴らしい』

「…………なあ……」

「《ファンクラブが存在するほど人気がある》」

「さつきから何言つてるんだ?」

廊下を歩いていたフランシスは、後ろで喋っていたアルフレッドのほうを振り向いた。

\* \* \* \* \*

「実は 軽音部の顧問になつてもらいたいんだつ」

「だから俺のことよいしょしてたのね」

「…………めんな

俺、吹奏楽部の顧問しているからかけもちまちよつと……」

フランシスが申し訳なさそうな顔をする。

「…………」

アルフレッドは眉をハの字にする。

「本当にめんな

「《今まで声をかけてきた女の人の声は数え切れず……》」

「だ、だからおだてても無理ですっ！」

\* \* \* \* \*

じーつ

フェリシアーノがフランシスを見ている。

「?どうしたんだ?」

「先生ってここ卒業生?」

「? そうだけど… どうして?」

「さつき見た軽音部のアルバムに先生に似た人がいたから…」

ビクッ！とフランシスが反応する。

「み…みんな ちょっと音楽室来てっ！！！」

「え…ど、どうしたんですか？」

\* \* \* \* \*

「ほらこの人先生でしょ？」

「……よくわかつたねフェリシアーノ…」

フェリシアーノが写真の人物を指差す。その人物は派手なメイクをぱっちりしていて、よく見ないとフランシスだとは分からない。

「そりだよ……俺、高校の時にこの学校の軽音部にいたの……」「い……意外でした」

涙目の中年シスにアーサーがそつと囁く。

「それじゃ、ギター弾けるんだね！」

「ちょっと弾いてみて下さいっ！」

フェリシアーノが自分のギターを渡す。

「…………

しゃーねーなー……」

( ( ( ( 田付き変わった――――? ! ) ) ) )

\* \* \* \* \*

ペロツロロロロロロロロロロ

「 「 「 「 速弾き? ! 」 」 」

「 「 「 「 タッピング? ! 」 」 」

ギャアアアアアアアア

「 「 「 齒ギター? ! 」 」 」

「俺のギター? ……」

「お前が音楽室好きに使ってやがなんだよ……」

「い、めでなせー……」

「やつぱりー」

\* \* \* \* \*

「…………」

素に戻った

床に座りこみ、泣くフランシス。

「先生になつたらおしとやかなキャラで通すつて決めてたの……」

「ヒーヒと涙を流すフランシス。

「…………先生……」

ぐすりぐすりと震わせるフランシスの肩にすっ手をやつしゃがむアルフレッド。

「他のみんなにバラされたくなかったら顧問やつてやつなんだぞ  
ええーつ? !」

(アルフレッド、たくましこそー……)

アルフレッドを見てそんなことを思つフロシアーノだった。

## 第1・2話（後書き）

有難うございました！

エリザ姉さんの活躍を期待していた人すみませんでした。  
だって最近フラン兄好きなんだ…！どうしてもメイン（？）にしたか  
つたんだ…！

あと今回の話、菊が空気なのは原作でムギが空気だからです。

次回は…ふわふわ時間、きますよ！

## 第13話（前書き）

どうも、火野村です。

さつきけいおんのアニメ見てました。さわちやん超活躍！ライブでね……あれは……ヤバいよ。いや、俺の脳内で。

さわちやんは俺の脳内ではフラン시스兄ちゃんだからね。『テス』『テレビルだとい、

今、本物つてえのを

見せてやる!!!!

…つてねー！さああああ兄ちゃんか！」――――――

あはは、では本編どうぞ。

## 第1-3話

\* 音楽室\*

「まあ顧問も決まったことだし後は本番に向けて頑張るだけだねー。」「ほほほむつやり顧問にされたんだけどねー。」

ガツツポーズで意氣込むアルフレッシュと、隣で腕を組み溜め息をつくフラン시스。

「相変わらず音楽室好き勝手使つてんじ……お菓子までわかれとで」

「まあまあ固こ」とこわすアーティ

「まあまあじやなこいつの全くー。」

「先生もケーキおひとこかがですか?」

「ほーほー」と怒るフラン시스に菊が笑顔で叫ぶ。

「いただきまーー!ー!ー!ー!

\* \* \* \* \*

「む…おこ…

セイコエビ学祭でやる曲は決まつたのか？」

ケーキを食べながらフランシスが聞く。

「はい オリジナル曲をやる」と思つて  
「今 練習中なんです

お茶じり

アーサーと菊が笑顔で答える。

「先生 僕たちの演奏見てくれないかい？  
ケーキも食べたことだしさつ」

「…仕方ないなあ…」

アルフレッドに、フランシスがお茶を飲みながら答える。

「なんならついでに演奏中のパフォーマンスも教えてや」「それは  
いいんだぞ!」「

黒い顔のフランシスにアルフレッドがすばさうと言つた。

\* \* \* \* \*

ジャー...。

「ふー、どうかな先生」

演奏が終わって、アルフレッドがフランシスに聞く。

「もうだねえ...」

いろいろ気になる事はあるナビ...まあ

「ボーカルはいないの?」

( (あ、つ) )

\* \* \* \* \*

「オリジナルってことは歌詞も作らないといけないんじゃないじゃないの?」「あ...歌詞なら作ってみました」

おずおずと恥ずかしそうにアーサーが紙を出す。

「わー見せて見せて!」

「え...でも恥ずかしい...」

後ろから覗き込んできたフェリシアーノに、慌てて紙を隠すアーサー。

「えへ見せてよーー！」

「で……でも……」

フェリシアーノとアーサーのやりとりを見て、菊は微笑み、フランシスはいらっしゃるとする。

「はよ見せんかい」

怒ったフランシスがアーサーから紙を取り上げた。

\* \* \* \* \*

「どれどれ」

フランシスは紙を見る。その脇からアルフレッドも紙を覗いた。

キミを見てるといつもハートDOKI DOKI  
揺れる想いはマシユマロみたいにふわ  
ふわ

いつもがんばる キミの横顔  
ずっと見ても 気付かないよね  
夢の中なら 二人の距離  
縮められるのにな

ああ力ミサマお願ひ

二人だけのDream Timeください

お気に入りのうそびやん抱いて

今夜もオヤスミ

ふわふわ時間 ふわふわ時間

「つおお…体が…かゆつ…」  
「鳥肌がつ…！」

二人の反応に、アーサーはガーンとショックを受けた。

\* \* \* \* \*

「お、俺としてはいい感じに書けたと思つんだけど…」

「やつぱりダメかなあ…」

アーサーはつるつと瞳に涙を浮かべる。

( ( ハハ … 一 一 ) )

「ダメって、いかそんの… なあ？」

フランシスは焦る。

「ほらフヨリシアーノからも何か言つてくれよー！」

同じく焦るアルフレッドがフヨリシアーノの肩に手を置く。

「…すいぐこ…」

れいわいわいわい

( マジで――――? )

六六六六六

「いや……だつてこれだよ？」  
ふわふわ時間だよ？ タイム

「ウニカ」

なおも表情を輝かせるフェリシアーノにアルフレッドが聞きなおした。

「俺はすつごく好きだよ」の歌詞！」

「ほ…ほんとか？」  
フリシアーノが、かしごとアーサーの手をにぎる。

「さあ菊はどう思ひへ?」

アルフレッドが菊のほうを向く。

ほわ――  
：

( 超ひどいところだね――? ! )

\* \* \* \* \*

「…菊も気に入ったのかい?」

「はいっ」

「正直にこのアコだと懲りへ」

「ええ」

( だつて二人とも…  
こんなに楽しそうなんですねの )

菊ビジュンではフーリシアーノとアーサーがBLに見えます

「本人同士がいいならいいんじゃなこドショウつかわー。  
君は何を言つてるんだい」

田を輝かせる菊に、アルフレッドが言った。

## 第1-3話（後書き）

有難うございましたー！

替え歌なんてサービス作者にはないよー

ふわふわタイムすきだ…

次回も頑張りまーす！

## 第1-4話（前書き）

久しぶりすぎますね。すみません…他の小説ばっかりだつたりしてるので…本当にすみません。

では本編どうぞ。

## 第14話

「フランシスはこの詞はなこと思つよね？」

アルフレッドが尋ねる。

「そ そうだな」

「なあみんな、もう少し考え直したほうが…」

アルフレッドが言つて。

(…までよ~)

考えるのはフランシスだ。

(このこつきやぴきやぴした曲好きって言つた方が、俺のイメージ  
上がるのかもー)

「お 僕もこの詞好きかもー」

「あれえ?！」

\* \* \* \* \*

「それじゃもうこの歌詞でいくか…」

トホホ…とアルフレッドが言つと、わーい、と喜ぶフーリシアーノ  
と菊。

「それじゃアーサーがボーカルつてことで、

「えつ?…」

アルフレッドの言葉にアーサーが驚く。

「お、俺は無理だつ……。」

「なんでだい？」

慌てるアーサーにアルフレッドが聞く。

「こんな恥ずかしい歌詞なんて歌えねえよおー。」

「おい 作者」

\* \* \* \* \*

「アーサーがダメとなると……」

アルフレッドが振り向くべし、あいかわらず顔を輝かせるフーリシアーノと田代が合づ。

「…フーリシアーノやつてみるかい？」

「お、俺？！」

驚きながらもビックリが嬉しそうなフーリシアーノ。

「で……でも俺そんな歌つまくないし……俺なんかがつとまるかどりつか

…」

そう言つたフーリシアーノの顔はこわばつていて。

「じゅあ菊やつてみるかい？」

あつむり

「『めん…歌う…歌いたいですー』…」

\* \* \* \* \*

「それじゃあひょつと歌つてみよ!」  
「うじゅーつー!」

ビシッと敬礼のポーズになるフューリシアーノ。

「キミを見ると、こつむ…」  
「フューリシアーノちょつとひょつと」

歌い出したフューリシアーノに、アルフレッドが制止の声をかける。

「ギター弾きながら歌わないと」  
「あ、忘れてたー」  
えへー、と眉をハの字にして笑うフューリシアーノ。

じゃかじゅかじゅか

「今度は歌忘れてるだ

一生懸命ギターを弾くフューリシアーノにアーサーが言った。

\* \* \* \* \*

「ギター弾きながら一緒に歌歌えない…」  
ずーんと沈むフューリシアーノ。

「…仕方ないなあ…」

フランシスがすっとフェリシアーノの手にしゃがむ。

「先生が一週間つきっきりで特訓してあげるー。」

「先生つーー！」

自分の肩をがしつかむフランシスに、目を輝かせるフェリシアーノ。

「それじゃまず歯ギターのやり方は…」

「それはいいです」

\* \* \* \* \*

- 1週間後 -

「みんなー待たせたなー！」

ガラツと部室の扉を開けたのはフランシスだった。

「さあフェリシアーノーー！」

フランシスの言葉に、フェリシアーノがじくじくと頷く。

ギャイイイインッ

「おおーーーギター上達してるーーー！」

アーサーが驚きの顔をあげる。

「（ガラ声）キミを見るといつもハートDOKI DOKI  
…」

フェリシアーノのガラ声に、みんながずつこけた。

\* \* \* \* \*

「いやー練習をせすぐちゃった」

「（ガラ声）声 枯れちゃった」

「ダメじゃないか！…」

そろつて てへつ と舌を出す2人にシッ 口もアルフレッシュ。

「それじゃ ボーカルどうするんですか？」

菊があせつた顔でアルフレッシュに向かう。

「つ～～ん…」

腕を組み考え込むアルフレッシュ。

「…やっぱり歌詞作ったアーサーが歌うしかないんじゃないかい？」

「へ？」

サツと青ざめるアーサー。

「ふしゅ――――――」

「おおおおおこ――――」

頭から湯気を出して倒れていくアーサーに、アルフレッドは叫ぶの  
だった。

本番まであと3日

## 第14話（後書き）

次回文化祭本番です。  
アーサーかわいいよアーサー

## 第1-5話（前書き）

わあ畠山さん、学園祭ですよ……！

最近アニメけいおん！…が楽しいです。  
アニメ見ると小説かきたくなりますが。  
脳内変換おつ wwwww

では本編どうぞ。

## 第15話

・学園祭当日・

「うわーっ

人いっぽいのよな…緊張してきたあ」

フーリシアーノが舞台の幕間から客席を見て言ひ。

「よーし　今じた練習の成果を見せる時だぞーーー。」「うんっー。」

ガツツポーズをするアルフレッドとフーリシアーノ。

「…む…おいアル…」

すると、廊の陰に「」と隠れるよつてしているアーサーがアルフレッドに向をかけた。

「ん?なんだいアーサー?」「なんだ、つて、その…」

アルフレッドが尋ねれば、アーサーは顔を赤くしてさりと隠れてしまう。

「あーもう、なに恥ずかしがってるんだい?ー」「うわつ?ー」

アルフレッドがアーサーの手を引いて、扉の陰から引っ張り出す。

「な、なに恥ずかしがってるんだ、って、お前にそ、

なんでこんな格好で平氣なんだよっ！…」

そう言つアーサーの格好は、

白い布の丈の短いワンピースのような服に、茶色のサンダル、背中には白い羽根、頭には金（といふか黄）のわつかといふ、まあ分かりやすく言えばブリタニアエンジェルの格好だつた。

ちなみにアルフレッドは悪魔（結構露出あり）、フヨリシアーノは魔女（といふか魔法使い）、菊はシスターといふ格好だ。

そつ言つ衣装なので、みんな人前だと相当恥ずかしいだろつ。

「うっぷふつー良く似合つてるんだぞアーサーっ」

そう言つて笑つアルフレッドの頭に、アーサーの必殺チョップが炸裂した。

\* \* \* \* \*

- 3時間前 -

「じゃ イレ体育館まで運んで下せこ

部屋の前、菊がフューリシアーノにアンプを手渡す。

「おわつー。」

「ああ、重いから気をつけて下さいね

フューリシアーノがアンプの重さで前のめりになる。

「ヴヒー、そういうえばアーサーは?」

「ああ、アーサーさんは他の事をやって貰つてこなさいですよ

「今のアーサーさんは危なつかしくて機材運ばせられないですか  
らね……」

「あー……」

《(ふらふら……) 僕がボーカル… ガシャーン! 機材を落と  
す音》

今のアーサーが のようになると、容易に想像できた。

\* \* \* \* \*

「それにしても…」

「なんでアンプってこんなに重たいんだね?…

よつよつとアンプを運びながらフューリシアーノは呟く。

フェリシアーノはその場に「アンプ」を置き、ふーっと息をつく。

そして「ふと横を見ると、

」

鼻歌を歌いながらドラムを運ぶアルフレッドの姿があった。

（あ…汗一つかかずに…）

「ん? どうしたんだいフェリシアーノ?」

\* \* \* \* \*

「はあー運び終わった~」

ぺたん、と床に座り込むフェリシアーノ。

「お疲れ様です、お茶入れましたよ」「さすが菊!」

お茶とお菓子がのつたお盆を持った菊を見て、フヨリシアーノは立ち上がった。

お茶の最中。

「そういえば、アルフレッドアーサーのことはよく知ってるよね  
『そりゃ幼なじみだからねー』

「幼稚園からずっと一緒にだし…あれ? 小学校からだけ?  
『幼なじみ…だよね?』

\* \* \* \* \*

「アーサーって小さい頃から恥ずかしがり屋さんだったの?  
『そうだぞー』

俺が

『うわー　きれいなかみだねー!..』

…って言つたり

『すごーい　ひだりききなんだー

みんな――アーサーお！」によー』

…って言つたら

「顔真っ赤にして恥ずかしがつていたもんな――」  
「いやそれアルフレッドのせいじゃん！！」

あははー、と笑うアルフレッドに、フェリシアーノがシッコリを入れた。

\* \* \* \* \*

「機材運ぶの終わつたか？」

「ヴェ、アーサー！」

ガラツと扉が開いて、入つてきたのはアーサーだった。

「お？なんか落ち着いてるじゃないか」  
「ん？」

「あんなボーカルするの嫌がつてたのに」  
「そんな、子供じやないんだしょ」

アーサーは自分の椅子に座る。

「いつまでも、動搖して、いられない、つつの」

そう言つアーサーの声と手は震えていて、手に持つたカップと受け皿が力チャ力チャと音を立てていた。

(めぢぢくぢぢ動描してゐじぢなにかーーー)

\* \* \* \*

「そんな調子でじりあるんだよ…」

モニタ

す=んと暗ぐたるア=ナ

「アル！ 僕とボーリカル代わってくれ！」

「櫻花のうらべ」

「んじやべーズビ」

「それも俺がやるから！！」

卷之三

卷之三

そして涙目のアーサーと言い合いするアルフレッドだつた…

## 第1-5話（後書き）

最初の幕間で控えてるところが一番かいてて楽しかったです。この衣装は前から考えてたので、かけて嬉しいです。

次回本番でーす

## 第1-6話（前書き）

第1-6話です！

これじゃしたとおり廻祭りの最中とかね。

では本編どうぞ！

## 第16話

泣いてすがりつくアーサーをなんとか剥がそうとアルフレッドが苦戦していると、扉がガラッと開いた。

「みんないるなー！」

入って来たのはフランシスだった。

「先生ジーしたの？」

口のまわりにクリームがついているホーリシアーノが首を傾げる。

「ふふふふ…」

「不本意ながらも軽音部の顧問になつたことだし、何か手伝ひ」と  
ないかと思つて、

衣装作つてきましたーっー！」

ばーん、と衣装を取り出すフランシス。

(ノリノリだーーー！)

\* \* \* \* \*

「いや…先生、気持ちは有難いんだけど…」

アルフレッドが言つ。

「ちよつとタイミング悪かつたかな…」

アルフレッドが振り向くと、案の定

「あんな服着て歌うの？」

とこつ頬で真っ赤になつてゐるアーサーがいた。

「うーん…」れはお氣に附せなかつたかあ…」

フランシスの言葉に、アーサーはじくじくと頷く。

「じゃあ俺の昔の衣装はどう?」

「あー…やつぱりさつきの服着たくなつてきたー…」

フランシスの昔の衣装を見たアーサーが涙目で言つた。

\* \* \* \* \*

「ストップ、フランシス…！」

びしづゝ、とアルフレッドが腕を突き出して叫ぶ。

「こんな衣装アーサーじゃなくても着るの恥ずかしいよ…」

「だ、だよな…」

アーサーが、アルフレッドの自分への贅同にほりどす。

「そつかなあ…頑張つて作つたんだけどなあ…

…それに」

フランシスがフヨリシアーノたちの方を見る。

「フヨリシアーノたちは喜んで着てるだ」

「君たちーーっ！－！」

セーラー服やナース服を恥じらいもなく着ているフヨリシアーノと菊に、アルフレッドの怒鳴り声がどんだ。

\* \* \* \* \*

-そして本番 -

客席はすでにわいわいと賑わっている。

「よーし　みんな　いべぞーっ－－！」

「「おーっ－－！」」

アルフレッドの声に、みんなが腕を突き上げた。

アーサーは、緊張によりぶるぶると震えていた。

「まだ緊張してるの？」

ひょいっとフランシスが現れる。

「あ、アーサーだつて分からないよ！」メイクしてやりつか

「いつてきまーすっ！－！」

ふふふと黒い笑みを浮かべるフランシスに、アーサーは冷や汗をかきながら舞台へと出た。

\* \* \* \* \*

アーサーがマイクの前に立つた瞬間、わああああっ、と客席から歓声が上がる。

(だ…だめだ…!)

顔を真っ赤にして、アーサーは緊張に耐えていた。

「アーサーっ…！」

そんなアーサーに、フェリシアーノが隣から声をかける。

「俺 アーサーが頑張って練習してたの知ってるから…」

「絶対大丈夫だよ！」

「がんばるっ！」

\* \* \* \* \*

「くつ、とアーサーがアルフレッドに頷いて、合図を送る。

「1・2・3・4！！」

カツ、カツ、とステイックを鳴らして、演奏が始まった。

『キリ!』を見ると いつもハーネドOKI DOKI!』

わああああ、と密席から歓声が上がった。

\* \* \* \* \*

『みんな、ありがとーっ』

額から汗を伝わせながら、アーサーが言つ。

(これでアーサーも恥ずかしがり克服できそうだな)

それを見て、アルフレッドが思つ。

そして、退場しようと舞台を歩いていた時。

ガツーとアーサーはコードに足をひっかけてしまい、びたんっ！！

と派手に転んでしまつた。

「ハセム！」

あいたたたたた…」

と、アーサーがなんだか騒がしい客席を振り向く。

読者の皆さん、アーサーが今着ている衣装を覚えているだろ？  
うか。 そう、その衣装なわけだから、当然、スカートのようになつて  
いるのだ。

つまり、コケた状態の今、客席からは

パンツ丸見え

ところである。

ג' עי

…」ついで、今年の学園祭は幕を閉じました…

\* \* \* \* \*

- 翌日 -

「みんな 昨日はお疲れ様なんだぞ…」

部室にて、アルフレッドがみんなに話す。

「フェリシアーノは初ライブにしてはなかなかのものだつたよ…」  
「いやー…」

そう言ってフェリシアーノは照れくさがりになります。

「アーサーはファンクラブまでできたらしいぞ…」

「わーっ！ 激いですね！」

“アーサーたんファンクラブ会員募集中！” というポスターを見て、菊が感嘆の声を上げる。

「…当の本人は再起不能だけどね…」

部屋のすみでじょんと体育座りをしているアーサーを見て、みんなが「あ～あ」という顔をした。

## 第1-6話（後書き）

有難うございました！

アーサーかわいいよアーサー。

次回クリスマス会編

## 第17話（前書き）

へたおんの投稿…久しぶりすぎます…！  
アニメけいおんももうすぐ終わりですか…はあ…  
こつちはまだ単行本1巻も終わってないといつのに…

## 第17話

「みんなー、クリスマス会のチラシ作つたぞーっ」

12月のある日、部室に入つてくるなりアルフレッドがそつと書つた。

…？

三人はクエスチョンマークを浮かべた。

「…あれ？クリスマス会つてやることになつてたのか？」

「私も聞いてませんでしたけど…」

チラシを見て、アーサーと菊が言ひ。

「だつて誰にも言つてないからね」

「言えよ」

\* \* \* \* \*

「おいおい…場所勝手に菊の家に決めちまつて大丈夫なのか？」

チラシには、“場所・菊の家”となつてゐる。

「あの…その日は都合悪いんですけど…」

「あ…やつぱりダメだつたかい？」

「その…

うちには常に何かしらの予定が詰まつてるので、一ヶ月前に予約とらないといけないんです…

本当に『めんなさい』

「そ… そつなのか」

( ( どんな家? ! ) )

\* \* \* \* \*

「アルフレッヂさんの家はどうなんですか？」

一  
あゝタメタメ

菊が問うと、アルフレッドではなくアーリーが答えた。

「アリスレットの家は汚くて足の踏み場もねえから」「なんだとーつ?ー!ー!」

アーサーの言葉にアルフレッドが叫ぶ。

「なんだよつ！アーサーの部屋なんか服が脱ぎ散らかってるくせにつ  
ペンソツとか」

「ま  
真顔でたらめ言つなーー！」

ノルマニー

「フ…フヒリシアーノ君のおつかせはいいですか？」

「別にいいよ？」

あつさり

\* \* \* \* \*

「でも クリスマスに大人数で押しかけて大丈夫なのか？」

「うん その日は両親いなから」

「そういえば前にフェリシアーノの家行つた時も、両親いなかつた

よね」

「そういえばそうだな」

アルフレッドとアーサーは言つ。

「共働きとか？」

「あ、いやそういうのじゃなくて…」

アルフレッドの問いに、フェリシアーノは両手を左右に振る。

「うちの両親、よく一人で旅行するんだ…  
クリスマスはドイツ行くんだって」

((ラブラブ夫婦!—))

\* \* \* \* \*

「料理の準備は俺に任せて！」

「大丈夫かあい？」

胸をはるフーリシアーノ、アルフレッドは笑いながら囁く。

「あーあれやらないかい、プレゼント交換ー。」

「あ、いいですね」

アルフレッドの提案に、菊が賛同する。

「アーサー、変なもの持つて来なごれよー。」

「…それはお前だろ」

アーサーが少し眉をひそめる。

「小学校のとき、アルから貰つたプレゼント開けたら…  
中から『びよーん』って…」

…要はびっくり箱だつたらしい。

(…ベタだなあ…)

\* \* \* \* \*

- 帰り道 -

「うわ…寒くなつたねえ」

アルフレッドが言つ。

「あー…

ルートー。」

フェリシアーノは、道の先にいたルートヴィッヒを見つけて、駆けていった。

「フェリシアーノたちも今帰りか？」

「うん！ そうだよ！」

「部室でクリスマス会のことを話してて…あ、そうだ！」

ルートヴィッヒも軽音部のクリスマス会に参加しないかい？

「え…俺は部外者だが…いいのか？」

「全然いいんだぞ！ フェリシアーノの友達だし！

（ぼそつ）人数増えたほうが会費増えるし

「それをどうする気だ」

アルフレッドの咳きが聞こえたアーサーは、そつしちコハを入れた。

『それから俺はみんなと分かれたあと、ルートと一緒にプレゼント交換用のプレゼントを買いにいきました』

「あ、これ可愛いーー！」

とある店で、置いてあつたぬいぐるみを見てフェリシアーノが言つ。

「ルートお、俺これにする～」

「だが、自分に当たるとは限らんぞ？」

「あ、そつか…

じやあこれでいいや」

「おい」

フェリシアーノは、某育成系携帯ゲーム機のキャラクターのような  
ぬいぐるみをつまんで唇を尖らせた。

## 第17話（後書き）

中途半端だ…

次回クリスマス会です！

## 第18話（前書き）

更新遅くなつてすみません…クリスマス会当日です！  
フランが若干アレですが、まあ温かい目で見て下さると有り難いで  
す。

・クリスマス会場

「やつぱーつ

フーリシアーノー來たんだぞーー！」

フーリシアーノの家に、3人はやつて来ていた。

「こりつしゃい監さん」

「あ ロウイーノ！お邪魔しまーす」

「いえいえ、楽しんで行つて下さー。」

あ、じゃがい…じゃなくて、ルートヴィヒさんは少し遅れやつですよ」

「? うなのか! といひでフーリシアーノは?..」

「おーいっ監あがつて~」

リビングのほうから、フーリシアーノの声がする。

がちゃ

「フーリシアーノー！

…つて…

なにしてるんだい?」

「ヴェー…

やつ出したら止まらなくなつちやつて」

そこには、輪つかの飾りを作つてこるフーリシアーノの姿があつた。

\* \* \* \* \*

「うわー料理す」いんだぞーっ！！

「凄いでしょ！頑張つたんだよ！」

「兄貴じゃなくて俺が、な」

フェリシアーノの言葉に、ロヴィーノは冷静にツッコミを入れる。

「あ…やつぱりロヴィーノが作ったんだな」

「失礼な！俺だって手伝つたよ！」

アーサーの言葉に、フェリシアーノが言つ。

「じゃあ、フェリシアーノはどれ作つたんだ？」

「このケーキ！！」

「ワオ 深いね！！」

「……の上にいちご乗せました」

「俺の言つた『深い』を返してくれ

\* \* \* \* \*

「メリーー

クリスマースー！」

かんつとグラスが鳴る。

「いやー…今年も終わっちゃうねー

「ー

「やだなあ親父へやー」  
アルフレッドの一皿に、フランシスがくすくすと笑つてから、料理  
をもぐもぐと食べる。

.....

もぐもぐ

「おわーーーーハラソシス? ! !」

「これ美味しいね  
おかわり貰える?」

驚くアルフレッドを尻目に、フランシスはロヴィーノに料理のおか  
わりを頼んでいた。

\* \* \* \* \*

「全く、顧問を呼ばないなんてどうでもいいけど、  
フランシスはほんとめ」と怒る。

「いやあー…忘れてたわけじゃないんだけど…」  
アルフレッドは苦笑する。

「先生は彼女と予定があると思つて  
呼ばなかつたんだよ!」

めきつ

フエリシアーノの言葉に、笑顔でフラン시스はフォークを曲げた。

「そんな」と囁ひのせ」の口かあああああつ？！」

ぎゅー……

「は、はれー（あれー）？」

（……天然はずいじ……）

フラン시스に両頬をつかれるフエリシアーノに、アルフレッドはそんなことを思つた。

\* \* \* \* \*

「罰としてフエリシアーノはこれに着替えなさい」

「なんでそんなの持つてるのさ…」

フラン시스がゼンから取り出したのは、ヘンリエッタ・スカサンタの衣装だった。

（着替え中）

「…ぞ、どうかな？」

着替えが済んだフエリシアーノが、少し頬を染めながら囁く。  
まあ確かに似合つてはいる。  
似合つてはいるのだが。

「…駄目だな！

フェリシアーノは恥じらいが足りない！」

フランスの言葉に、ガーン、と軽くショックを受けるフェリシア  
ー。

卷之三

卷之三

フランスにやりと見られたアーサーは、ビクッと反応する。

じりつ、と近付いてくるフランシスにアーサーは後ずさりし、そしてダッと逃げ出した。

一  
あつ  
！

「あ！！逃げるな！！」

「そりゃ逃げあるよ!!」

ドタバタとアーサーとフランシスのおいかげっこが始まった。

六六六六六

ГЛАВА VI

アーサーがつまづく。

「はつはあ！つかまえたあー！さあおとなしく！」ニースカサンタに着替える！

「嫌です

「む、だつたら着替えさせぬまで！」

「うわなにしゃが、ぎやあああセクハラ——!」

「すまない、遅くなつた」

騒がしい中、がちゃりと扉が開いて、ルート・ヴィッヒが入ってきた。

そこには、アーサーの服を脱がそつとアーサーに覆い被さっている  
フランシスと、そのフランシスの下で涙目になり服を脱がされかけ  
ているアーサーの姿。

.....

ルート・ヴィッヒは扉を開いたポーズのまま数秒固まって、

「…すまない、間違えた…」

と言つてバタンと扉を閉めた。

「間違つてない！助けろルート・ヴィッヒいいいつ！」

アーサーの悲痛な叫びが、部屋に響いた…

\* \* \* \* \*

「さーて、気を取り直してプレゼント交換でもしようか！」

「そうですね」

「うう…もうお婿に行けない…」

涙声でやつてアーサーを尻目にしたアルフレッドの提案に、菊も  
賛同する。

「あ、でも先生は……？」

「大丈夫！」

「ほら、ちゃんと用意してきたんだ！」

「おー サスガ！」

プレゼントの箱を出すフランシスに、アルフレッドが言いつ。

「……本当は今日、彼女に渡すつもりの物だつたんだけど……」

(……重たい……)

\* \* \* \* \*

「それじゃ始めるぞ……」

やけくそ

「ああ……うん……」

フランシスのやけくそな一言で、プレゼント交換が始まった。

「お、俺はアーサーのだな」

「あ……先生それは……！」

アーサーは止めようとしたがすでに遅く、フランシスは箱を開けてしまった。

びょーん びょーん

.....

「...あはははは最高のクリスマスだな-----つ---！」

「うわーっ 先生が壊れたあ-----つ---！」

そうして騒がしく過ぎていくクリスマスの夜だった...

## 第18話（後書き）

有難うございました！

しかし、アニメけいおんも終わっちゃったし、こっちも頑張つて早く進めないとけいおんブーム去つちゃうよなーと思いつつ小説かいります。

次回も頑張ります。

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとっています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n2271k/>

---

へたおん！

2010年11月1日11時58分発行